一　歩

社会福祉法人 アルカディア

令和 4年 6月 発行 第45号

・令和３年度決算を読む

令和３度もコロナ禍が続いた。いろんな「制約」がある中で、よく頑張ている。利用者・職員の日頃から「感染対策と危機意識」を維持した結果であり、最大の成果であった。全ての利用者、職員、関係者に感謝したい。

このような状況下で、事業運営も困難を伴う展開であった。決算を読むにあたって、まず、一丸となって頑張ってこれたこともあわせて評価したい。

以下、決算報告およびコメントを掲載する。収支については収入（事業活動収入・施設整備等補助金収入・その他の活動収入）、支出（事業活動支出・施設整備等支出・その他の活動支出）を合算して表記する。また、人件費率については、人件費（給与・賞与・法定福利費・共済費）を収入で除した数値である。

●法人全体

収　入	285,217,511
支　出	272,703,716
収支差額	12,513,795
人件費率	71%

ほぼ、令和２度と同額の黒字である。ただ、当初予算では1,500万円の収益を見込んでいたことからすれば、目標値に達していない。コロナ禍がまだ続くことを見越して更に工夫が求められる局面を迎えているといえよう。少し気になるのは人件費率が70%を超えたことか？しかし、人件費を抑えるのも現実的でない。職員は生活を背負っているのだから。

●共同生活援助事業（グループホーム）

収　入	113,051,399
支　出	103,840,789
収支差額	9,210,610
人件費率	49.10%

昨年度の収支差額は約650万。人件費率が1.4%の伸び率。新規雇用増員した上での結果ゆえ、前進である。また、グループホームを二か所新築移転し、融資返済がある中でこの結果は大きい。

今後は医療機関との更なる連携強化がカギを握るだろう。

●就労継続支援B型事業（麦の家）

昨年度より約100万の増加にとどまった。コロナ禍で新規通所者数が伸び悩んだ結果である。職員もなんとか努力を惜しまず奮闘しているが、いまだ実を結ぶにはいたっていない現状。どのような「特徴」をもつかがポイントになるだろう。

これからも奮闘の日々は続く。

収　入	28,682,796
支　出	24,685,801
収支差額	3,996,995
人件費率	72.80%

●ふらっと相談支援事業所

収入	3,584,739
支出	1,852,866
収支差額	1,731,873
人件費率	42.30%

昨年度同様、評価できる数値。

相談支援専門員２名で多くの利用者に丁寧かつ「質の高い計画相談」を心掛けサービス提供をしている。ただ、現場では職員が悲鳴を上げている。もう一名はスタッフを増やしたいところだが…赤字も避けたい。

思案のしどころだなぁ。

次に「委託事業」の決算状況をみていく（※委託事業のため、具体的なコメントはなしとする）

●援護寮　はばたき（群馬県よりの指定管理）

収　入	67,985,914
支　出	71,200,855
収支差額	△3,214,941
人件費率	92%

「はばたき」は、コロナ禍と改築工事で事業が思うように実施できなかった。やむなき結果である。

●太田市地域活動支援センターⅠ型　ふらっと

収　入	22,150,738
支　出	22,168,548
収支差額	△17,810
人件費率	80%

●太田市地域活動支援センターⅢ型　耕人舎

収　入	15,745,197
支　出	15,776,470
収支差額	△31,273
人件費率	63%

●アルカディア相談支援事業所

収　入	11,400,030
支　出	11,622,902
収支差額	△222,872
人件費率	96%

●委託事業には他に「地域生活拠点事業」がある。ただ、R3年度の事業実績はゼロであった。

・【総 評】障がい者福祉サービスの「質と量」あるいは「善意と悪意」の狭間とは？

○安くてうまいのがいい

　果物を買いにスーパーに行く。
リンゴが好きでよく買う。このとき、いつも迷ってしまう。5個パック800円と７個入り500円どちらを買おうか？？？一個あたり160円と70円の差。
　当然、800円の方がうまいに違いない。でも貧乏性が身にしみついているのか？つい500円の方に手がでてしまう。

○福祉サービスも同じだ

　本題からははずれたことを言っているようだが…。
つまり「福祉サービス」において、「質と量」の問題を問いたいのだ。サービスの量を増やせば収益につながる。しかし、量を増やすことを優先すれば、「サービスの質・理念は後回しにされがちになる。難しいところだ。ある人がこう言った。「理念など実践の過程でおのずとついてくるものだ」と。この発想にも一理ある。ともかく実践が先だ！ということなのだが。
　「理念」は、実践に規程されたものになってしまいがちだ。
　消費者が求めているのは、７個入り500円でおいしいリンゴなのだ。理念というより庶民の願望である。福祉サービス利用者も同様なのではなかろうか？
　丁寧で、一生懸命に、そして温もりがあるサービス、つまり「質と量」両方が感じられるサービスを求めているのでは…。

○「良かれ」と思うサービスが「質と量」をもたらすか？

　しかし、「質と量」両方をかねそなえたサービスを提供するのは、そう簡単なことじゃーない。福祉の現場をみていて、つくづくそう思う。良い質のサービスが量的な結果をもたらすとは限らないから…。福祉サービスの「質と量」は両立させたいが、果たして思い通りにできるものなのか？
　例えば、次のようなことが挙げられる。
　十数年前、「耕人舎」で農作業を始めた折、日曜日にスタッフが野菜を収穫するため、朝早くから出勤していたことがあった。スタッフからしてみれば、「一日、収穫が遅れると野菜が大きくなり、売れなくなる」と。ここには「良いこと」という「善意」がある。でも「それは本末転倒だからやめよう」ということにした。
　又、数年前、「指定特定相談支援事業」についてとある行政職員と「人手が足りない」と話し合っていた折、その職員は「一人で100人以上やっているところもありますよ」と。「収益を上げる工夫をすればいい」とでも言いたかったのだろう。100人をこなしているスタッフにしてみれば、多くの障がい者が福祉サービスを受けられるから「良いこと」と思っているかもしれない。これ自体をとやかく言うつもりはない。100人以上の「計画相談」をやれないことはないかもしれない。しかし、その内容（質）は確実に劣るものとなるだろう。
　蛇足ながら、高齢者介護の分野で入所者の食事を「一人、一分以内に終えさせる」職員が「介護のプロ」と称賛されると聞く。まさに質より量が優先されている。

○今や、臓器も「モノ」と化し、「良かれと悪しき」の境界が失われつつある

　他の領域でもこのような問題は起きている。例えば、「臓器移植」。医療の進歩により、「臓器移植」は実現可能となった。ところが「臓器移植」を待ち望んでんでいる人々に比べて、「臓器」が圧倒的に足りない。このような状況の中で「臓器の売買」という商売が成り立つことになる。臓器を提供（売る）人々は、大抵の場合、貧困層だ。一度、売買業者の手に渡った臓器は、「出どころ」を問われることなく、「臓器移植」の医療界にゆだねられていく。こうして人間の「臓器」は「モノ（商品）」と化していく。限りなく「グレーゾーン」の世界。ここにおいても「臓器の（供給）量」が優先される。問われているのは、人が生まれ持った「臓器」が売買されるという質（事の善悪）だ。

○目標工賃ランキングは「良し」なのか「悪しき」なのか？

　B型事業所において「工賃アップ」を目指している。工賃が高いほうが、「利用者」にとって良いことだという思いがスタッフにはある。それは間違いではない。ただ、その思いのどこかに、

「目標工賃達成」によるランキングがちらついているのも確かなことだ。国が定めた工賃ランキングにより収益が異なる。ここで「工賃」は量的なものとなり、ランキングが結果としてつきまとう。経営的な発想でいうなら、収益性が上がるにこしたことはない。収益を上げるために「工賃ランキング」を維持し、アップしようとする姿勢は、ホントに利用者本位になっているのか？経営的に物事を考えるのは、まったくシンドイことだと痛感してしまう。

「理想・理念と現実とは違う」といってしまえば、それまでだが…。どちらが先か、優先か？を問うのは「卵とニワトリどちらが先か？」と同じように意味なき議論と言われれば、そうかもしれない。

「質と量」双方を利用者、職員ともども求めたい気持ちは変わらない。

ただ、福祉サービスにおける「質と量」の両立、あるいは「良かれ」が「悪しき」につながる危うさは、課題としてこれからもつきまとう。

ふと、あることわざが思い浮ぶ。＜地獄への道は善意で敷きつめられている＞

【註】善意で「良かれ」と思っている行為も往々にして、悪しき道へとつながっていることがある、また、「悪しき」その行為は「善意」でおおい隠されてしまいがちになるという意味（誰の言葉か？忘れた）

（編集部）

コラム
～ウクライナ情勢から、わたしが思うこと～

「昨今のウクライナ情勢の報道や記事について、それらに触れる時間が長い人ほど不安感や孤独感が強まり、抑うつ状態になる。」との見解が示されているようだ。
これはいわゆる“共感疲労”というものからきているものらしい。
共感疲労とは、感情移入のしすぎや、病気などで苦しんでいる人への継続的な世話が生む、心理的な疲弊との意だそうだ。
もともとは医療・介護・福祉で働く人たちが多くなりやすい現象であったとされている。

この情報過多社会では、自分が欲する情報以上のものが、いともたやすく入ってくる。実際、世の中が今どうなっているかを知るのは社会的に必要なことだとは思うが、“知る範囲”というのは個々人がきちんと線を引いて決めるべきだと思う。
しっかり記事を読まないと。見出しだけ？いやいや全文読みなさい。現地の写真をたくさん見て、現実を飲み込むべきだ。それらに関して深い感情を抱かないとだめだ。
―なんて強要は、誰であっても出来ないもので、誰であってもしなくてよいものである。

冷たいようだが、世の中の大半の出来事は他人事なのである。
「他人事で済ませていいとき」むしろ「他人事で済ませたほうが助かるとき」があると私は思っている。これは決して物事から目を背けているわけではなく、いわばこの情報過多ストレス過多社会を生き抜く処世術、といったところだ。

相手(物事)との距離を保つ。相手(物事)と自分を切り離して考える。自分のコンディションを整える。自分が疲れていることに気づく。癒されるものに触れる。睡眠時間を確保する。
これが、“共感疲労”を防ぐ大きなカギであるとされている。

もし貴方が、感受性が強く、社会的使命感を持った、好奇心が旺盛なタイプであるならば、これらのカギを常に心に抱きながら、無理せず日々を過ごしてもらいたい。

【記】グループホーム事業所　宮﨑

編集後記

ご拝読、有難うございます。

本号は、2021年度の決算報告を取り上げました。もう少し、踏み込んだ内容にしたかったのですが、紙面の都合で簡潔な内容にとどまりました。貸借対照表などの読み取りに踏み込み、当法人の現状を明らかにした上で、福祉法人の将来的な経営的展望を来年度から触れていきたいと思っています。

（ニュースレター編集委員）

法人本部：群馬県太田市鶴生田町733-123
TEL：0276（20）2509　FAX :0276（20）2510
ホームページ：http://arcadia-gr.com/